

藤沼に水の溜まるのは、どんな大雨でも長雨の時でもなく、自現太郎様がお出になるときだといわれている。

水が溜まると、その中に御幣を立てて、善男善女が長い参詣の列をつくる。そしてそのお水を戴いて行つて痛ところなどに塗つたりして、病気の治療にもちいるならわしがある。

ある年、自現太郎様がおいでになり、沼は満々と水をたたえており、その周辺の檜の大木には、数百年も経た藤の大木が満開に咲き乱れていて、沼の水に写つてみごとな景観を添えていた。そこに数人の婦人の人達が、お水を戴きにまいり、思い思いの容器にお水を戴いている。ちようどそこを通り合せた瀧方面の男の人がこれを眺めていたところ、何を思ったのか、どれどれどんな岸辺の水より真中の良い水をおれが汲んで来てやると、尻を端折つて沼の中にじゃぶじゃぶと入つて行つた。

ちようど真中頃まで行つたとたんに、その男の人は何を見たのか、顔面蒼白で、身ぶるいとものに腰も抜けんばかり。岸にはい上がつて来ると、久保道へ通ずる坂道を一目散に逃げ出してしまった。

沼地にいた女の人たちは何が起こつたのか、何もわからず、ただ呆然としてゐるばかりだった。

一目散に逃げて来た男は、久保のすぐ裏山に祀られている熊野神社の所まで走りつづけて来て、精根もつきてしまい、わなわなふるえてごまつてしまった。

するとそこに熊野様が現れて、その男を山の下までなげおろしてくれ、ようやく一命をとりとめたといわれている。